

ルカによる福音書23章26－56節 「罪、そして、それを赦す祈り」②

1A 異邦人に引き渡された主 1－43

1B 総督ピラトの悪 1－25

1C ヘロデへのたらい回し 1－12

2C バラバとの引き換え 13－25

2B ローマ兵の虐げ 26

3B 勘違いの悲しみ 27－31

4B 不法な者としての死 32－43

1C 赦す祈り 32－38

2C 悔い改める犯罪人 39－43

2A 正しいかった主 44－56

1B 百人隊長の証言 44－49

2B 議員ヨセフの願い出 50－56

本文

午前礼拝に引き続き、ルカ 23 章を読み進めていきます。26 節からです。ピラトがイエス様を十字架刑に処する宣告を出しました。その後の出来事です。私たちはさらに、人間の悪と罪を見ていきます。しかし、そのことを敢えてお許しになられて、ご自分の御子イエスにそれらを負わせた、その贖いと罪の赦しの話を読んでいきます。

2B ローマ兵の虐げ 26

26 彼らはイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ、この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。

イエス様が十字架を担ぎながら、歩かされています。この時点で、鞭打ちの懲らしめをイエス様は受けており、その衝撃はとてつもなく強く、鞭打ちになった囚人ではショック死する人も少なくありません。そのためイエス様は、極度の疲労と体の痛みによって、その十字架を担ぐことさえできなくなりました。そこでローマ兵が、「田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ」とあります。マタイ 5 章 41 節に、不当な仕打ちを受けた時にどのように弟子たちが対応すればよいのか？を教えてください。「あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」ローマ兵が、道端の人に「一ミリオン、すなわち 1.5 キロメートルを歩いくように命じたら、うんも言わず歩かせることができます。こんな理不尽なことはありませんが、イエス様は、強いられる以上のことを行って、愛と尊敬を示しなさいと教えておられました。理不尽なことは、私たちは職場で、いろいろなところで受けます。その時に、「神はここにおられるのだろうか？」とってしまうでしょう。けれど

も、はい、おられます！というのが、この出来事です。

クレネというのは、北アフリカの地中海沿岸の植民都市で、ギリシアとローマ時代に栄えていたところでした。「田舎」とありますが、エルサレムからはるかに遠いということで、クレネ自体は都市です。今は、そこは世界遺産に国連によって登録されており、リビアの中にあります。そこからユダヤ人であるシモンは、過越の祭りを祝うためにやって来たのです。はるばる巡礼に来たのに、ローマ兵によって命じられてしまって、やれやれだったでしょう。けれども、次に「この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた」とあります。シモンは、イエス様の歩かれる姿をずっと見ていたことになりま。イエス様が弟子たちに、「日々自分の十字架を負って、わたしについて来なさい」と言われたことを、文字通り、ここでは彼が行うことになりました。

そしてこの男シモンは、キリストの弟子になったようです。マルコ伝に「アレクサンドロとルフォスの父(15:21)」とあります。初代教会における名の知れた人であると考えられますが、ローマ 16 章 13 節には、「主にあつて選ばれた人ルフォス」と言っています。同一人物かもしれません。そして使徒行伝 13 章 1 節を読みます。「13:1 さて、アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。」ここの「シメオン」はシモンと同名です。彼自身が教会指導者の一人となっています。このように、ローマ兵に強いられて十字架を運ばせられた理不尽さから、神は新しい命を与える働きを始められたのです。

3B 勘違いの悲しみ 27-31

27 民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな一群をなして、イエスの後について行った。
28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから。30 そのとき、人々は山々に向かって『私たちに崩れ落ちよ』と言い、丘に向かって『私たちをおおえ』と言い始めます。31 生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。」

ルカ伝は、女たちが多く登場させていますが、ここの箇所もルカにしか見ることでできないものです。女たちがイエス様のために嘆き悲しんでいます。ここで民衆も女たちも、嘆き悲しんでいます。イエス様はむしろ、彼女たちのことを気にしておられて、もっと深いところにある罪、そして神の裁きがあることを伝えておられます。

30 節ですが、終わりの日の患難のことを指しています。その時に生き残っているユダヤ人が、その患難があまりにも酷く、神の怒りに耐えきれなくなり、「われわれの上に倒れかかってくれ」と叫ん

でいるのです。イザヤ書 2 章 10-22 節にその様子が書かれているし、黙示録では、小羊が第六の封印を解いて大地震が起こりました。その時に彼らが叫びます。「6:16-17 そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちが隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」」イエス様は、その世の終わりの型となる、紀元 70 年のエルサレムの神殿破壊のことを言われているのだと思います。その時に、包囲されたエルサレムの中にいた女たちは、あまりにもの飢えで自分たちの赤ん坊を食べました。この悲惨を話しています。

そして「生木」というのは、イエス様ご自身です。イスラエルのメシアであるイエス様は、命ある木としてご自分を例えておられます。旧約聖書に、イスラエルを木に例えているところがあります(エゼキエル 21:6-7)。そして、枯れ木とは命のないイスラエル、メシアのいないイスラエルのことです。イエス様が生木であり、彼らがそのようなことをするなら、神は枯れ木に対しては、もっと大きな裁きを与えられます。

女たちは、イエス様を気にかけているようで、実はとても表面的な悲しみに留まっています。イエス様が、蒔いた種が岩地に落ちて芽が出たけれども、日が上ると枯れてしまうというような心の状況です。女たちが、感情的に泣いたりして反応しても、それが必ずしも、罪の深みや本当の悲しみが分かっていないということです。例えば、イエス様についての映画を観て、その生涯に涙する人が多く出て来るかもしれませんが、しかし、自分の罪を知って、深く悔い改め、主に立ち返る人がどれだけ出て来るでしょうか？それと同じです。

4B 不法な者としての死 32-43

1C 赦す祈り 32-38

32 ほかにも二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。33 「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。

「ゴルゴダ」、すなわち髑髏とは、いかにも死刑が数多く行われている名称です。ちなみに、そのラテン語がカルバリーであり、私たちの教会で使っているのは、「どくろ教会、ロゴス東京」と言っているようなものです。そして、イエス様が犯罪人の間に十字架に磔にされています。ここで、主が強調されていた預言が成就します。過越の食事の席から発つさいに、弟子たちに対して、「22:37『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです。」と言われました。イザヤ書 53 章 12 節からの引用です。イザヤ書 52 章 13 節から 53 章の最後まで読むと、イエス様がどれほど鮮やかに、これらの預言を実現させていかれているのかが、手に取るように分かります。

34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。

ここが、23章の十字架の出来事において、最も大切な言葉でありましょう。このような数々の不条理と理不尽の最中で、イエス様は「赦してください」と執り成すことによって、「すべての罪の赦し」という神の贖い、救いを成就しておられるのです。

まず、「父よ」と呼びかけておられます。イエス様の生涯は、父と子の関係の中で過ぎていきました。マリアが聖霊によってイエス様を身ごもる時に、「1:35 生まれて来る子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」とガブリエルが告げました。そして、バプテスマを受けられる時に、「3:22 あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と父なる神が呼ばれていました。そしてイエス様は、10章21節では、弟子たちが悪霊を追い出して戻って来た時に、「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。」と言われています。そしてゲッセマネの園において、「22:42 父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。」と言われました。そしてこの箇所があり、十字架上で息を引き取る時に、46節ですが、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」と言われたのです。

イエス様は、これらの出来事が、父なる神の定めであることを知っておられました。そのご計画の中で、ご自身に対するあらゆる人間の罪がなすりつけられていることを知っておられました。ゆえに、主は、これらの人々が行っていることがあっても、父との関係の中で、父を信頼しているので、お赦しになることができます。ヤコブの息子ヨセフのことを思います。兄たちによって奴隷として売られるという悪を受けましたが、ヨセフは兄たちを心から赦しています。「創世 50:20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのために計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。」ですから、いかに罪が深くとも、いかに不条理でも、どんなに不法でも、それらは神の御手の中にあり、キリストにある贖い、罪の赦しが備えられているということです。

そしてイエス様は次に、「彼らをお赦してください」と言われています。イエス様は、公生涯の時に何度となく、「あなたの罪は赦されました」と宣言されました。床に運ばれてきた中風の男に、宣言されました。そしてパリサイ派シモン之家にやって、足を涙で洗った不道德な女にも、罪が赦されたことを語られました。人は、罪の赦しがどうしても必要です。罪のともなう罰に、私たち人間は苦しみ、悩んでいます。そしてダビデが詩篇51篇で告白したように、それは、神の権威がなければ、本当の意味で赦された確信がありません。「51:4 私はあなたに、ただあなたの前に罪ある者です。私はあなたの目に、悪であることを行いました。」人に対してどれほどの悪を行ったとて、自分の命を、実に死後の命さえその罪は自分を追いついて、見つけ出します。これほどにまで、どうしようもないほど、罪の赦しが必要ですが、とことんまで罪が露わにされている中でイエス様が祈りをささげられたことによって、全ての罪の贖いがなされるのです。「エペソ 1:7 このキリストにあって、私たちはその血に

よる贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」

そして、「彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」とされています。これは、自分が背きの罪を犯しているということさえ気づいていないということです。パウロは、自分の過去を振り返って、こんなことを言っています。「I テモ 1:13 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。」知らないことだったので、神から憐れみを受けたと言っていますが、イエス様は彼らが憐れみを受けるように祈っておられるのです。そして、これらの執り成しの祈り自体が、メシアが行われる執り成しとして、イザヤ 53 章に記されています。「53:12 彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

ところで、「赦してください」という祈りは、そのまま自動的に赦されるということではありません。しばしば、悪いことをしている人について、その悪を捨てるように促す時に、「あなたはその人を赦していないのか？」と逆に責め立てることがあります。それはあってはならないことです。主が赦される時に、それはその犯した罪を悔いて、主に立ち返ろうとしているからこそ、赦してくださいます。使徒 2 章で、ペテロが、「あなたがたが十字架につけたのです。」とはっきりと責めたら、彼らは、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか。」と尋ねました。ペテロは言いました、「2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」悔い改めてということが、罪の赦しとその人のものになる瞬間です。イエス様の祈りはまさに、人々が罪が示されて、悔い改めて、神に立ち上がることを祈っておられるものです。

ところで、「彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。」とルカは一言書いていますが、これは売るためです。当時、衣服は貴重なものだったので、また売ることができます。そしてルカが兵士がしていたことをわざわざ書いたのは、詩篇 22 篇にある預言が実現したからです。「22:18 彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします。」

35 民衆は立って眺めていた。議員たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」36 兵士たちも近くに来て、酸いぶどう酒を差し出し、37 「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ってイエスを嘲った。38 「これはユダヤ人の王」と書いた札も、イエスの頭の上に掲げてあった。

民衆が立って眺めています。二日前まで、主の言葉を聞いていたかもしれない民衆です。そこで、この方がキリストかもしれないと思っていました。ところが、今、このような無残な姿です。それぞれが、「救い」について語っています。議員たちは、イエスが、ご自身がキリストであることを認めただけで、王であり救い主でなければいけないのに、自分がその十字架から救われることはできないとし

てあざけりました。けれども彼らの言葉にも、一部真理があります。「あれは他人を救った。」と言っていることです。多くの人の病を癒し、悪霊を追い出し、罪の赦しの宣言をされました。他人を救いました。けれども、ご自身は救われない身、病の身、罪人として数えられている身です。

次に兵士たちの立場で、「救い」を語っています。「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」であります。兵士たちは、一部の熱心党員との戦いをしていました。反乱を起こし、なぜなら、メシアがユダヤ人の王でローマを倒すと信じていたからです。ですから、ユダヤ人の王であれば、我々に勝利してみろ、自分を救ってみろ、と言っているわけです。そして罪状書きも、ローマのカエサルに反逆した者として、「ユダヤ人の王」としています。ここから分かることは、議員にしても、兵士にしても、救いが、自分の置かれているところからの物理的な状況の話しかしていないことです。

2C 悔い改める犯罪人 39-43

しかし次に、イエス様が十字架上で執り成しをされたことが、早速、父なる神が聞いてくださった出来事があります。

39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」42 そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

犯罪人が二人かけられています。他の福音書によると、二人がどちらもイエスを罵った、とあります(マタイ 27:44)。犯罪人たちは犯罪人たちで、「救い」を自分たちが十字架に付けられているところから救われる、状況からの救いを考えていました。ところが、一人が気づきます。彼は第一に、「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。」と言っています。彼は、そこから救われようとせずに、むしろ今、受けていることはその通りであると、その裁きを甘んじて受けています。彼は「救い」の意味を知り始めました。それは、罪を認めるところから始まる救いです。罪からの救いなのです。救われるためには、まず自分自身のしたことの報いを受け入れることです。先ほど、ダビデが罪を犯したことを告白する詩篇(51 篇)を読みました。そうやって神の裁きは正しいことを甘んじて受け入れるところから、始まります。多くの人が、「自分が罪を犯した」という認識が薄いので、何か試練が来ると、「そんなはずではなかったのに・・・なぜ神はこの試練から私を救われないのだ」として、つまづくのです。

そして、この裁きを受け入れて、初めてイエス様に願っています。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」と言っています。イエス様が確かにキリストであり、王で

あることを認めています。そして王であるなら、特赦も出すことはでき、それで罪の赦しをここでお願いしているのです。そしてこの犯罪人は、自分もイエス様もすぐに死ぬことは分かっていますから、死者の復活も信じています。死者が復活し、その後の御国にキリストが着かれ、そこで罪も赦されて、自分も御国に入ることを願っています。ここで彼が願っているのであり、要求していないことに気をつけてください。他の人々は、「救え」と要求していました。しかし、彼は願っているだけです。ここにイエスに自分のことを決める権威を持っておられることを認めています。救いを得ることは、権威に服することです。救う、救わないの決定、主権は神にあるのです。そして権威に服する人は、安心と平和を見つけます。

そしてイエス様の、この犯罪人に対する答えが彼の願い以上のものでした。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」であります。パラダイスとは、日本語で「樂園」ということです。旧約聖書では、エデンの園のような樂園のことを指します（イザヤ 51:3）。主が地上において御国の位に着かれる前、主が昇天されてからの天を表しています。パウロが、「第三の天」とパラダイスのことを呼んでいます（2コリント 12:4）。こうして、イエス様は死なれる時に、一人の人を確実に救いへと導かれました。ここに罪と暗闇の中に、一筋の贖い、美しい罪の赦しの働きがあるのです。

2A 正しいかった主 44-56

次もそのとおりです。主が死なれ、その死なれた姿を見た人たちに、イエスを正しい方と認めた者たちが現れました。

1B 百人隊長の証言 44-49

44 さて、時はすでに十二時ごろであった。全地が暗くなり、午後三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。すると神殿の幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

十二時になってから、父なる神ご自身が介入を始められました。罪に対して神が裁かれている姿が、太陽の光が失われている所に表れています。アモス書には、まさに祭りの最中に、真昼に暗くなることが預言されています。「8:9-10 その日には、——【神】である主のことば——わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする。あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたの歌をすべて哀歌に変える。すべての腰に粗布をまとわせ、頭を剃らせる。その時をひとり子を失ったときの喪のように、その終わりを苦渋の日のようにする。」

そして、イエス様が最後、おそらく三時頃でしょう、息を引き取られる時に叫ばれました。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」「ゆだねる」という言葉は、前に置くという意味があります。それは、まな板の上の鯉のような、窮地に立たせられても慌てることなく、自分の身を相手のなす

がままにさせているような状態です。たとえ、それが闇の中に自分を投げ打つような時でも、それでも父なる神が自分を受けとめてくださるということです。そして、自分が息を引き取られても、父が必ず死からご自身を救われる、つまり甦らせてくださることを信頼して、死なれました。

私たちは困難が来ると、慌てる、あたふたとする、何か方策を立て、物事を動かしていこうとする、それらは自分の前に見える暗闇の中に入るのを、恐れているでしょう。しかし、だからこそ神に自分のすべてをゆだねれば、神が受けとめてくださいます。

47 百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、「本当にこの方は正しい人であった」と言った。
48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、これらの出来事を見て、悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。49 しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちはみな、離れたところに立ち、これらのことを見ていた。

三つの種類の人々が、これらの出来事に反応しています。一つ目は、ローマの百人隊長です。驚くことに、彼は異邦人であり、律法については無知であるはずですが。しかし、彼は神をほめたたえ、そしてイエスが正しいということ、死後に初めに証言したものでした。彼の証言した正しさは、言い換えると御父に信頼した正しさです。自分がいかに正しいかを主張する時に、人は疲れ、怒り、対立し、分裂します。そうではなく、神の正しさに自分を徹底的に従わせ、信頼を寄せるときにこのように、真実な正しさが現われます。正しいというのは、神の憐れみと平和と一対になっており、そこには癒しがあり、一致があり、へりくだりがあるのです。このようにして、人々の罪の中で、贖いの働きが起こり、主が死なれた後の第一証言者は異邦人であるローマ百人隊長でした。

そして群衆の反応ですが、「悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った」とあります。先ほど、民衆がじっくり見ていたとありましたが、彼らはここでイスラエルを贖ってくださるはずの方がこのような無残な形で死んでしまわれたことに悲しみを覚えたのでしょうか。弟子たちも同じ反応でした、次の章、エマオの途上にいた二人の弟子の一人がそうした反応でした。

それから、遠くから離れて見ていた女たちがいます。興味深いですね、この女たちは静かに仕える人たちです。イエス様にいつも付いていて、従っているのですが、けれども意見を主張したりしません。人が言い争い、怒り、憎しみ、その罪と悪の巣窟のようになっていたその場から、離れていました。けれども、イエス様から目を離していたのではなく、遠くから見ていたのです。すばらしい、静かに仕える人々の姿です。

2B 議員ヨセフの願い出 50-56

そしてもう一人、これまでイエスを罪に定めていた議員の中に、実はイエス様を正しいとみなしていた人がいました。

50 さて、ここにヨセフという人がいたが、議員の一人で、善良で正しい人であった。51 ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた彼は、議員たちの計画や行動には同意していなかった。52 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。

ヨセフは、議員でありながら、この時に初めてイエス様に付いていることを明らかにした人物です。「アリマタヤの出身」ですが、そこはサムエルの町、「マラタイム・ツォフィム(1サムエル 1:1 参照)」であると言われています。ですから、霊的な遺産が受け継がれていたのかもしれませんが、そして、「善良で正しい人」という評価ですが、これはイエス様がお生まれになる前後、祭司や敬虔な者たちが同じように表現されていました。ゼカリヤとエリサベツ(1:6)、エルサレムで赤子イエスを見て預言したシメオン(2:25)です。初めにこのような人々が出てきましたが、主が死なれた後に再び出てきました。彼は同じように、「神の国を待ち望んでいた」とあります。他の議員たちがイエスを殺す計画を立て行動に移しましたが、同意していませんでした。ヨハネの福音書では、ニコデモもまた議員であったのに、同意していなかったことが書かれています(12:42)。

53 彼はからだを降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られていない、岩に掘った墓に納めた。54 この日は備え日で、安息日が始まろうとしていた。55 イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだが見届ける様子を見届けた。56 それから、戻って香料と香油を用意した。そして安息日には、戒めにしたがって休んだ。

ヨセフが申し出ていなかったなら、イエス様は共同墓地に投げ入れられていたことでしょう。けれども、彼は裕福であり、自分のために使おうと思っていたのでしょうか、「まだだれも葬られていない、岩に掘った墓に納めた」とあります。そしてこれは、イザヤ 53 章での預言の実現でした。「イザ 53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。彼は不法を働かず、その口に欺きはなかったが。」

そして、女たちが香料と香油を用意します。安息日になるので、戒めを守ってその時は葬ったけれども、遺体に香料と香油を塗る時間がなく、それで三日目の朝に出かけていきます。こうして、彼女たちが十字架と墓を見た人々であり、かつ復活の最初の目撃者となります。そして 24 章、復活の目撃者も女たちになります。主は不思議なことを行われます、最後の死の確認と、復活の目撃を女たちの手に託されたのです。他の宗教書であれば、男でなければ受け入れないということになるでしょう。しかし、ルカや他の福音書の著者の証言は逆です。ここにも、人々の能力や知識では、十字架を知ることは全くできなかったことを物語っています。私たちは、とことんまで人の罪深さを見て、しかし、そこに贖いがあることを見ました。イエス様は私たちの為にも執り成しておられます。